

OTANIing

大谷の「今」を伝える。「未来」へ繋げる!

御影堂と大銀杏



今を感じる 学校長 飯山 等

軽音楽部が演奏する「ブルーサイド」という曲が校内のサイネージで流れています(と言っても無音で、演奏する部員の映像と歌詞のテロップが画面に流れているだけです)。いつの

ことだったでしょうか、画面の前を通り過ぎようとしている私に、「僕らいまを感じているんだ」の歌詞が飛び込んできました。「いまを感じる?」と心に残り、早速You Tubeで聴いてみました。残念ながら、歳を重ねた私が一体となって共感するには無理がありました。次のような歌詞、「もしいまが誰かにとって 意味のない 無駄な時だったとしても はなさない こぼさない この瞬間を 僕らいまを感じているんだ」「Don't stop! keep moving! ときめく心」など印象深く、私に考えることをうながしました。そして、この歌詞に導かれるように、遠い過去に読んだはず、でもすっかり忘却していた、谷川俊太郎さん最初の詩集『二十億光年の孤独』の中的一篇、「今日の心はどうしたものか／とびあがりはねあがり／とどまるを知らない／歴史は日々のもと色うすれ／和綴じの糸もばらばらだ／とにかく今日みたいな日は／過去を想うには明るすぎ／歴史を読むには楽しすぎ／創造せずにはいられない／空想はつばさをひろげ／連想は花の輪となり／この欲求は全くの奔放／今日の心は全くおかし／とびあがりはねあがり／とどまるを知らない」に再会しました。

この詩を88歳になった現在の谷川さんは、詩的エッセイを編んだ一冊『幸せについて』に再録して、「1949年12月、18歳の時に書いた詩です。生きることが新鮮で驚きに満ちていた年頃でした。」とことばを添えています(p88-89)。「生きることが新鮮で驚きに満ちていた年頃」、私にとっても遙か彼方の時ですが、演奏するメンバーの躍動するパフォーマンスを見て、きみたちはその真っ直中なのだ実感したことです。顧問の小川香織先生から、曲名の「ブルーサイド」は、「青春の側」という意味だと教えてもらいました。曲中で繰り返される「Don't stop! keep moving!」は、外からの「止まるな!動き続けろ!」という命令ではなく、内から自発するいのちの声、ときめきなのでしょう。

ときめくいのち、それを私に言葉を必要としない事実として間近で教えてくれるのは、5歳になる新君のすがたです。神戸に住む長女夫妻に二人目の子が恵まれて、産後の身体を休めるために私たちの家で一ヶ月ほど過ごしました。もうすぐ5歳になる長男の新君は、まさしく、生きることが新鮮で驚きに満ちています。彼のいのちは、とびあがりはねあがりどまるを知りません。京都にいる間、いつもの保育園に行けない新君のために、おばあちゃんが近くの公園に連れて行ってくれます。おばあちゃんは鉄棒やサッカーのお付き合いでヘトヘトです。新君はまさしく、とびあがりはねあがり、「過去を想うには明るすぎ 歴史を読むには楽しすぎ 創造せずにはいられない」、驚きに満ちた、輝くいのちの全動なのです。

そしてそのことは私に、私にとっては遠い過去のことだとして喪失の悲哀を感じさせるのではなく、私にもまた確かにあった生きることの初源のすがたとして、今の私を勇気づけ、今の私をすなおに受け容れる力をもたらしてくれるのです。そして思うのです、そのときの熱は冷たく消え去ることなく、自身のいのちの深奥に刻まれ私の今を熱く息づかせている。確かに在ったその時が、今の私のいのちの意欲としてつねに私を更新する原動力となっている、と。

私は、小川先生に教えてもらう前には、「ブルーサイド」という曲名を、『憂鬱のそばに』と受け取っていました。憂鬱のすぐそばに、気づかないけれど、躍動するいのちが息づいている。ときめくいのちは消え去ることなく、憂鬱を支え、憂鬱に寄り添ってある、と。この受けとめは、あながち間違っていないのではとも思うことです。blueという語は憂鬱・優秀・厳格・猥褻と、指し示す意味の幅がすいぶん広い語です(日本語の青二才などに見られる未熟のイメージは英語ではgreenで表すそうです)。青春の側のときめき、それは5歳の幼子の純真と同じではないでしょう。憂いに沈み、嫌悪に暗く引き裂かれる。多くのマイナスと否定が、ひたひたと足下まで、時には胸元まで浸してくる……。しかし、それでもなお愛おしく、尊い、と。自身のみならず、他者を認める。その思いを、わたしの大切な思いとして生きる。それが「青春の側に」だけある独自の「ときめき」なのではないでしょうか。